

一日巡検資料 (2023・10/8(日))

「東京裏返し」社会学的町歩きガイド 吉見俊哉 集英社新書2020から
はじめにおよび第一日 都電荒川線に乗って東京を旅するからの要約

1, ゆっくり移動することの価値の復権をさせましょう。モモと一緒に東京を町歩きする。時間論としての街歩き

この東京の町歩きでは、過去が常に現在の都市の中に存在していることを確認し、同時に都市をゆっくり動いていく価値を再発見していきたい。

モモの冒険が「灰色の男達」から人々の時間を取り返す挑戦であったように、私たちの町歩きもまた、高度成長期以降の開発主義の東京から、再び人間的時間を取り返す戦略を・・・

ミヒャエル・エンデの『モモ』1976。モモと亀が時間泥棒「灰色の男達」から盗まれた時間を取り返す物語。

灰色の男達。町の人たちにプロパガンダ。時間を節約してこそ未来がある。
ラジオやテレビ、新聞は「時間のかからない新しい文明の利器」がいかに役立つかを強調
生活の効率化こそが「人間が将来『本当の生活』ができるようになるための時間を生んでくれると約束。

「灰色の男達」として描かれる時間泥棒達＝現代資本主義のメタファー

人々は知らず知らずのうちに、自分の時間を明け渡してしまう、つまりより効率的で便利な日常に身を置くようになるのですが、そうするとますます忙しくなり、彼らの「一日一日は、はじめはそれとわからないほど、けれどもしだいにはっきりと、短くなって」いったのです。

エンデは生きられる時間が創造される源となる場所として廃墟と墓地を、逆に時間が失われていく場所としてせわしなく活動が繰り返られるオフィス街を捉えています。

廃墟に住むモモが時間泥棒から人間の時間を取り返せたのは、彼女だけが遠くの過去からの声、死者達の記憶の声と自分の心の中のを響き合わせることができたからです。

モモが「さかさま小路」に向かう地区で「オソイホド ハヤイ」つまり、ゆっくり歩けば歩くほど前に進むことができた。街を早く移動しすぎることは、街を見失うことである。

街の景色の消費の仕方

歩く速度。時速3～4km 私たちの身体は町の一部。私たちは町の風景の中に身を置きながら二つの場所を移動

都市の中を移動している人間が、その移動している空間に内在していると感じられる限界。

それは、13～4kmではないか。

電車や車の中の人間は町から切り離される。例えば時速35km（山手線）、時速40km（車）

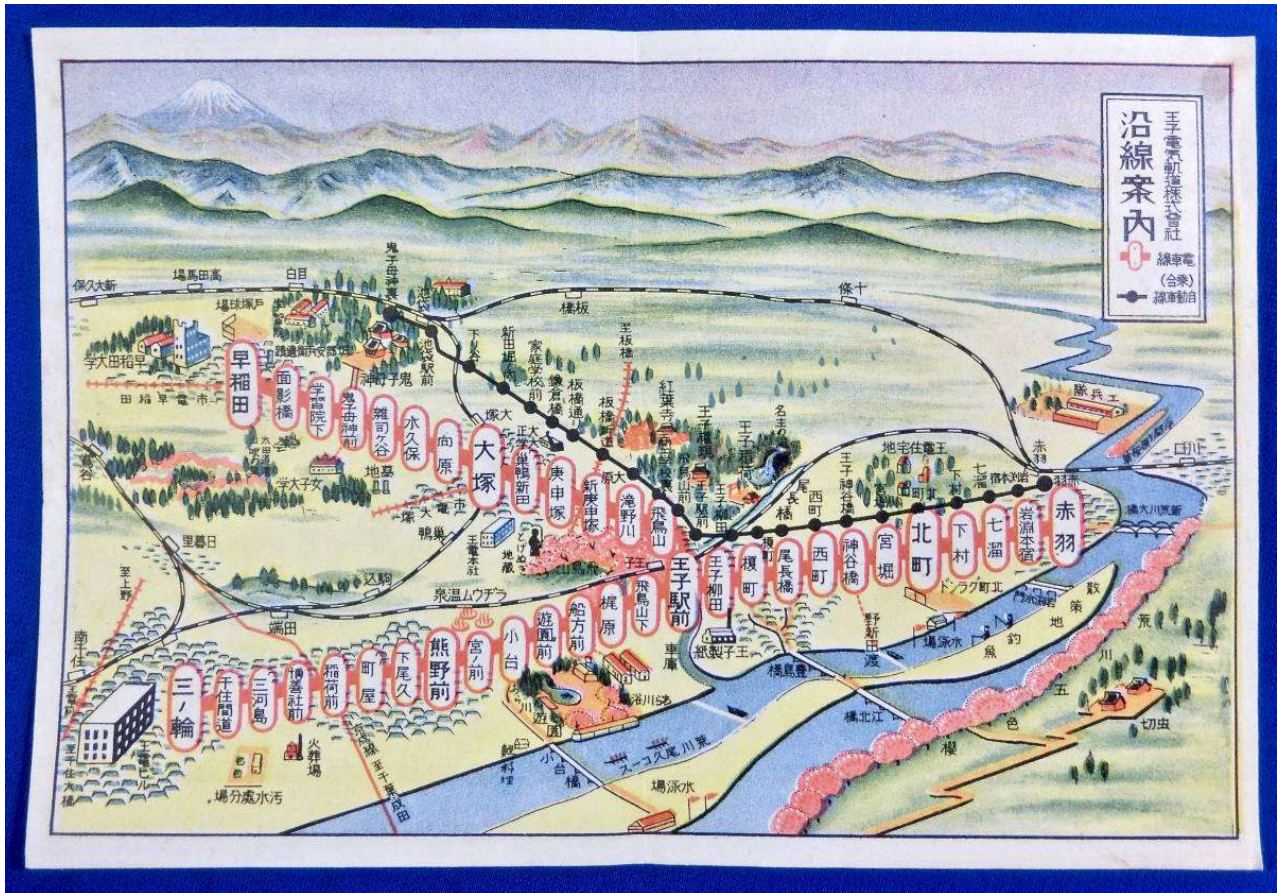
車窓越しの外の風景を自分とは離れた世界に属する映像的なイメージとして消費。

地下鉄、点と点の移動。機能的に移動するだけ。地上と結びつかない。

2. 江戸＝東京の外縁としての荒川線沿線 3つの時間の次元の視点

早稲田・三ノ輪橋間は古い東京市街の外縁に沿う。

シカゴ学派都市社会学がいう「遷移地帯」にあたり、都市の変化が最もよく現れる
都心と郊外の境界域に寄り添う



都市の中には少なくとも3つの時間の次元がある

① モビリティの時間、つまり速度

- 自動車や地下鉄の時速40kmの間に、荒川線（時速13～14km）というスローモビリティの速さがある。
この速さが可能にする都市の見え方を、荒川線に乗りながら考える

時速40kmが私たちを場所から乖離させ、視覚的な対象としてしか風景に関わることができなくさせてしまうのに対し、時速13～14kmは、私たちをその空間の中に留め、路上の街々と様々な相互作用を可能にするスローモビリティの代表選手である路面電車

路面電車はいわば「走る歩道」＝東京さくらトラム、唯一残った東京の路面電車。12, 2km。30停留場

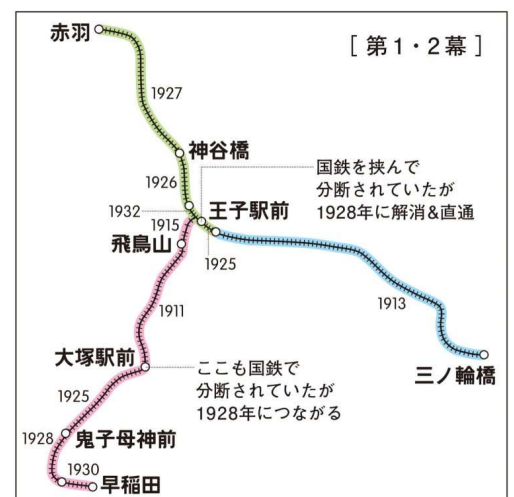
※1911年、王子電気鉄道（渋沢栄一、才賀藤吉出資）が施設、開業。

※東京の路面電車は1882年の東京馬車鉄道（新橋、日本橋間）開業に始まる。1905年までに都心部のネットワークが完成。日露戦争前後を境に、東京の空間秩序はこの路面電車網によって再組織化された。

前田愛『幻景の明治』岩波現代文庫2006

1960年代から70年代前半に廃止。

1964年の東京オリンピック開催が東京改造の大転機。



・散歩の達人 HP より

② 人が誕生し、やがて老い、死に至る人生の時間 が空間化している場所を訪ねる

・鬼子母神（法明寺）子授け、子育ての神様。 現代では少子化問題につながる

この場所が象徴しているのは母子の時間である。

子供の誕生が日本でも戦国時代の頃から特別な意味を持つようになった歴史。

生産力向上に伴う人口増加、直系家族化。母子の関係が強化。

それが、現在にまでつながり、今も少子化と母子関係の問題に私たち社会がどう取り組むかが問われ続ける



※鬼子母神 エテューケー（古代ギリシャの都市の財産と繁栄、そしてその運命を司る中心的な女神→聖母マリア）が原型。

シルクロード→インドの夜叉神の娘。→中国→日本へ。

（鬼子母神（ガンダーラ2～3世紀）大英博物館蔵）

※並木ハウス（手塚治虫が住む）「キアズマ珈琲」の裏手

・地藏通り商店街【おばあちゃんの原宿】 老いと病の都市史

とげ抜き地藏 病治療 安価な食と衣のバラエティ

信仰から食べ物まで多くが病を避け、健康を維持することに向けられている

小さな店でのショッピングが盛り場の根底を支える。街の賑わいを盛り上げる（原宿、新大久保、御徒町）
ターミナル駅や郊外のモールなどのショッピングセンターとは違う

1891年とげ抜き地藏（高岸寺）が明治政府の方針（仏教寺院は郊外に移す政策）下谷より移転
毎月四のつく日を縁日とする。大正、昭和を通じて門前の露天市。

1980年代以降活気

・日本初の公共墓地 雑司ヶ谷霊園 人間の死や葬送に関わる空間

雑司ヶ谷霊園（夏目漱石や小泉八雲、永井荷風など文化人が多い）は青山墓地（大久保利通や後藤新平など国家の中樞にいた政治家が多く葬られる）などと共に国家による死者の管理を象徴する場所となる
明治新政府は仏教寺院から死の管理者としての特権を剥奪→公園＝生者のための公共空間（1873太政官布達。飛鳥山、上野、浅草、芝、深川）や公共墓地＝死者のための空間 の整備

・死語の時間 東条英機の墓

東条英機の死後の身体をめぐる三つの墓

※火葬にされた東条の遺骨は粉々に粉砕され太平洋に投棄されている

1 東条英機の墓 実際は東条家の墓（東条英機の父英教が建立）東条家の家族がひっそり想像した墓

2 「殉国七氏廟」 愛知県三ヶ根山山頂 右翼が作り上げた神話

愛知県の三河湾を臨む三ヶ根山山頂に、東京裁判により昭和23年に絞首刑を執行された七人の方々の墓があります。



木村兵太郎氏 広田弘毅氏 板垣征四郎氏 武蔵草氏 東条英機氏 松井石根氏 土肥原賢二氏

処刑には米・中・ソ・英の連合軍代表が立ち会い、七人は陛下の万歳を三唱して台上の露と消えました。この時、マッカーサー司令部が七人の遺体も遺骨も家族に渡すつもりがないことが判明し、なんとか遺骨だけは手に入れたと考えた人たちがいました。

彼らは深夜、七人が火葬された横浜市久保山の火葬場に忍び込み、苦心のすえに遺骨の入手に成功します。遺骨は横浜久保山興禅寺を経て、松井大将建立の熱海伊豆山の興亜観音堂に安置されていました。当時、国の責任を極刑で一身にうけ、刑場の露となった殉国者に、日

本の世情は冷たいものでした。長らく遺骨の埋葬さえ許されず、回向すら人目を避けて行わなければならなかったのです。

それから 10 年あまりが過ぎ、有志の偶然の出会いから三ヶ根山頂に七氏の墓地建設が決まり、遺族をはじめ政財界、その他各方面からの賛同を得て、昭和 35 年に殉国七士廟の完成を見ます。同年、当地での最初の墓前祭が斎行されました。以来、墓の管理と墓前祭が奉賛会によって連綿と続けられ、はや半世紀以上の年月が過ぎています。一般社団法人殉国七士奉賛会 HP より

3 靖国神社 1978 戦犯 14 名の合祀 自民党右派勢力がこだわり続けている神話

・他者による人生の記憶

（東条英機は）米軍による記憶抹消による試みや

日本の右翼や右派による記憶化という政治の渦中に死後もあり続けたが

彼の家族は、雑司ヶ谷霊園に埋葬したことにするという、ただそのような記憶の仕方を取り墓参を続けた

つまり、墓は、モモが「どこにもない家」に行く際に通ったように、誰であれ、他者がその人生を記憶し続けるための留め金で、それが都市に中にあり続けることによって、過去は未来につながっています。

※敗者の墓は、いつも複数建てられる。近親者から残党まで様々な仕方で物語化される

例 近藤勇 板橋 会津若松天寧寺 米沢市高国寺 三鷹市龍源寺 岡崎市法眼寺の首塚 南千住の円通寺

③ 近代国家建設と資本主義発展、およびその裏面の歴史を空間的な痕跡として把握する

・王子で渋沢栄一の製紙業と日本の資本主義がいかに結びついていたかを考える。

王子 ・ ←→ 三ノ輪、南千住、山谷

飛鳥山 渋沢栄一のゆかりの地

近代資本主義の頂点 ←→ 近代資本主義の底辺 無数の低賃金労働者

抄紙会社（1873）→王子製紙 第一国立銀行（兜町）

紙と資本主義→資本主義とは紙幣である（1867パリ万博渡仏）

なぜ王子か 石神井川の水の存在

飛鳥山の風景

徳川慶喜の忠実な家臣 飛鳥山は八代吉宗が庶民が楽しめる桜の名所として開発

日本の近代資本主義を薩長によるものと言うよりも、徳川幕府が開いた江戸という都市の先に見ていた

以下の写真文章 三井トラスト不動産 王子・滝野川より



王子製紙 王子工場」の跡地は「サンスクエア」となっており、その前に「洋紙発祥之地」の碑がある。厳密には、「抄紙会社」での洋紙の製造は、国内で三番目の開始（他社で 1 年ほど前から製造されていた）となるが、生産高や、その後の発展から見て、王子が実質的な「洋紙発祥の地」として、1953（昭和 28）年に建立された。



写真は 1932 (昭和 7) 年頃の「王子製紙 王子工場」で、「飛鳥山」から工場を望んでいる。「王子製紙」は、1933 (昭和 8) 年に「富士製紙」「樺太工業」と合併し、国内の紙生産量のシェア約 8 割を占める企業となった。



写真は現在の様子で、鉄道に架かる橋は 1925 (大正 14) 年に竣工した「飛鳥山下跨線人道橋」で、過去の写真から変わっていない。「飛鳥山下跨線人道橋」には、1887 (明治 20) 年のドイツ製レールが再利用されている。



翌年、操業を開始。1877 (明治 10) 年に国産第 1 号紙幣となる「国立銀行紙幣一円」が発行された。写真は 1907 (明治 40) 年頃の「印刷局 抄紙部」の正門。【画像は 1907 (明治 40) 年頃】



「印刷局」は、その後、改組・改称を経て 1952 (昭和 27) 年に再び「大蔵省印刷局」となり、2001 (平成 13) 年に「財務省印刷局」、2003 (平成 15) 年から独立行政法人の「国立印刷局」となった。「抄紙局」からの歴史を引き継ぐ「国立印刷局 王子工場」(写真) では、現在は郵便切手や証券類の製造を担っている。敷地の西側部分は、北区が取得の上「北区役所」の新庁舎が建設される予定になっており、現在は基本設計などが進められている。

以下 飛鳥山 3 つの博物館 HP より



渋沢栄一の飛鳥山邸 ←飛鳥山邸 正面玄関

紙の博物館、北区飛鳥山博物館、そして渋沢史料館の 3 つの博物館が並び建つ飛鳥山には、近代日本経済の基盤をつくった渋沢栄一が住んでいました。明治 12 年 (1879) からは別荘として、そして明治 34 年 (1901) から亡くなる昭和 6 年 (1931) までは本邸として生活をしてきた飛鳥山邸は、「暖依 村荘 (あい い そん そう)」とも呼ばれ、単なる私邸にとどまらず、国内外からの賓客を迎えるなど栄一の活動拠点とし



での「公の場」という性格も持っていました。

8,470 坪という敷地内には、日本館・西洋館をつなぎ合わせた本邸を中心に、茶室など附属建物が庭内に点在しており、そして大正時代には、栄一を記念した建築物である晩香廬と青淵文庫が造られています。（渋）＊文章は、2008 年 4 月 24 日の配付資料より

※『青淵渋沢栄一翁写真伝』（昭和 16 年）より

飛鳥山邸 模型俯瞰図

※『青淵渋沢栄一翁写真伝』（昭和 16 年）より